放送大学研究年報　第37号（2019）119-132頁
Journal of The Open University of Japan, No. 37（2019）pp. 119-132

放送大学附属図書館所蔵「ちりめん本コレクション」調査ノート
―メディア史の視点から―

湯　川　史　郎[1)]

Bericht über die Recherche zur Krepppapier-Bücher-Sammlung (*chirimen-bon korekushon*) der Open University of Japan
―Erörterung aus medienhistorischer Perspektive

ShiroYukawa

要　旨

本稿では、2019年２月13日から21日にかけて行った放送大学附属図書館所蔵ちりめん本コレクションと関連文献の調査に基づき、(1) 放送大学附属図書館所蔵「ちりめん本コレクション」とその活用状況、(2) 日本国内ちりめん本コレクション、(3) ちりめん本研究史概観、(4) メディア史から見た「ちりめん本」研究の可能性、の四点について報告した。

ABSTRACT

Hiermit legt der Verfasser einen Bericht über die Recherche zur Sammlung von sog. *chirimen-bon* (Krepppapier-Büchern) der Bibliothek der Open University of Japan vor, die er vom 13. bis zum 21. Februar 2019 durchgeführt hat. Ausgehend von der Darstellung des Konzepts und Umfangs dieser Sammlung der seit 1885 in Japan hergestellten, nicht-japanischsprachigen xylo-typographischen Bücher sowie Kalender (1), ihrer Stellung zu anderen universitären sowie bibliothekarischen Sammlungen in Japan (2) und des Stands der Forschung zum *chirimen-bon* (3) wird aus einer medienhistorischen Perspektive erörtert, welche Forschungsfragen zu diesen besonderen Druckerzeugnissen in der Gegenwalt möglich und sinnvoll sein können (4).

0. はじめに

放送大学附属図書館は貴重書の収集と保存において、日本国内で重要な役割を果たしている機関の一つである。独自の指定基準[2)] によって集められた多岐に渡る収蔵品の中には、「幕末から明治初期に日本から西洋に発信された日本に関する多くの資料」（放送大学2011：はじめに）として、「日本残像」（放送大学附属図書館2000）と呼ばれる約200点の古写真のコレクションと「ちりめん本コレクション」が含まれている。

以下では、筆者が2019年２月13日から21日にかけて行った、放送大学附属図書館所蔵「ちりめん本コレクション」と関連文献の調査、それを通して考ることとなった「ちりめん本」が持つ史料としての可能性とその研究の方向性について報告する。「ちりめん本コレクション」という文化資源の研究や教育への今後の活用に少しでも資することができれば幸いである。

1. 放送大学附属図書館所蔵「ちりめん本コレクション」とその活用状況

放送大学が発行した『ちりめん本 ～昔の絵で見る昔噺～』（放送大学発行年不詳）は冒頭で、ちりめん

1) ドイツ連邦共和国ノルトライン・ヴェストファーレン州立ライン・ヴィルヘルム・フリードリッヒ・ボン大学人文学部東洋・アジア研究科日本・韓国学研究専攻専任講師。

2) 具体的には「(1) 和書は元和末以前、漢籍は民代隆慶末以前、洋書は1800年以前に刊行されたもの。(2) その他特に希少価値、資料的価値、芸術的価値があると認められるもの。(3) (1) 及び (2) に該当する資料を含むコレクション、個人文庫等で、一括して取り扱うことにより資料的価値があると認められるもの」（放送大学2011：はじめに）である。

本の製作者とそのはじまりを次のように簡潔に紹介している。放送大学附属図書館がちりめん本にどのような価値を見出し、収集してきたのかを伺い知ることができるため、ここに全文を紹介しておく。

> 明治時代に新しい絵本が生まれました。それは江戸赤本の伝統を汲むものでしたが、和紙を使用し、木版多色刷りで挿絵を入れ、文章を活版で印刷し、縮緬布のような風合いを持った絵入り本で、ちりめん本と呼ばれる欧文和装本でした。ちりめん本の生みの親、長谷川武次郎は、1853（嘉永６）年、江戸に生まれました。武次郎は、当時の日本では英語を習得することが学問や商売にって必須と考え、1869（明治２）年、英語を学び始めました。彼は近代商業についても学び、貿易や出版に関する知識も習得していきました。商人としてばかりでなく、彼はちりめん本を作る職人たちを取りまとめる才にも長け、英語を駆使して翻訳者と交渉し、国際出版の礎を築いていったのです。
>
> こうして1885年（明治18）年初秋、武次郎の努力によって「桃太郎」や「舌切り雀」等を筆頭に、英文による「昔噺集」が生まれ、日本の出版業界が新しい時代への一歩を踏み出したのです。（放送大学発行年不詳：１）

19世紀後半の明治日本と日本人が置かれたグローバル化の波の中で生み出された、日本出版文化史にとってエポックメイキングな書物という史料価値が、放送大学附属図書館がちりめん本を収集してきた根拠となっている。だたしこのコレクションは、引用に見られるような「長谷川武次郎の手による縮緬処理が施された日本昔話の本」という「狭義のちりめん本」だけでなく、それに関連するもろもろの印刷物を含むものである。

そしてこのコレクションは常に拡充されてきた。前述の2001年の目録（放送大学附属図書館2001）に収録されているコレクション数が204点、現在リポジトリ上で公開されている「ちりめん本」が283件であることからも明らかなように、「ちりめん本コレクション」は寄贈個人蔵書のような「閉じられた系」としての史料群ではなく、収集による拡張が続けられている「生きた史料群」でもある。筆者が調査を行った2019年２月の時点で、「ちりめん本コレクション」の総数は338点で、その大まかな分類内訳は次の通りである[3]。

長谷川弘文社による縮緬処理された本［A］：162点
長谷川弘文社による平紙で作った本［A］：66点[4]
長谷川弘文社による縮緬処理されたカレンダー［A］：75点
長谷川弘文社による平紙をつかったカレンダー［A］：14点
長谷川弘文社以外によって製作された、縮緬処理された本［B］：15点
長谷川弘文社以外によって製作された、平紙の本［B］：５点
長谷川弘文社以外によって製作された本[5]［B］：１点

以上の様に、長谷川武次郎の手によるものでも、「狭義のちりめん本」（162点）だけでなく、平紙のもの（66点）や書物の体裁を持たないカレンダーなど（89点）も含まれている。そして製作者によっても、［A］長谷川武次郎とその後継者の手によるもの（317点）、［B］それ以外の製造者によるもの（21点）に大別することができる。

放送大学はこの「ちりめん本コレクション」を積極的に活用してきた。資料によると、1997年度の千葉県生涯学習フェスティバルにおける展示「桃太郎とトムソーヤー」を皮切りに、放送大学独自のネットワークである全国の学習センターやサテライトスペースなどを活用した巡回展覧会を今日に至るまで定期的に開催している（放送大学附属図書館2001：２；放送大学発行年不詳：はじめに）。それは数多くの一般来場者に、近代日本のメディア史における極めて特殊な印刷物 ― 縮緬処理がほどこされたしわしわの紙、精巧で色彩豊かな木版画、欧文活字によるテクストの奇妙な結合物 ― を間近に目にし、その独特な風合とそれを生み出した明治末期という時代を身近に感じることができる貴重な機会を提供し続けている。また研究面では、2001年に『放送大学附属図書館所蔵目録 ちりめん本 長谷川武次郎とちりめん本の歴史』（放送大学附属図書館）を「今後のちりめん本研究の一助」（同書：２）となることを目的に発行している。さらに従来の印刷メディアからデジタルメディアへと一歩踏み出し、デジタルギャラリー「ちりめん本」コレクション[6]を公開する一方で、2013年10月から運用されている「放送大学機関リポジトリManapio」上において、デジタル化されたちりめん本の大半をPDF形式で公開し[7]、国内のみならず世界中のネットユーザーにこ

[3] 附属図書館提供のエクセルデータに基づく。ただし詳細な書誌情報はNo.210までだったため、それ以降の収蔵品（No.211からNo.338）に関しては実見あるいは画像データによって類別した。尚、調査期間中に全てを実見したわけではないため、この場で挙げた数字はあくまでも「大まかな」内訳でしかない点を強調しておく。

[4] レプリカ２点（No.325とNo.326）を含む。

[5] 表紙のみ縮緬紙で本文は活版・オフセット印刷。

[6] http://lib.ouj.ac.jp/gallery/chirimen_01.html（2019年10月27日最終アクセス）。

[7] https://ouj.repo.nii.ac.jp（2019年10月27日最終アクセス）。公開されているのは「貴重書」と「ちりめん本」のインデックスがつけられた283件のコンテンツで、その内訳は「日本昔噺集」139件、「カレンダー」84件、「平紙本アイヌ民話」３件、「その他」57件。

の貴重書の閲覧を可能にしている[8]。

このような取り組みは、ちりめん本に関心を持つ人々の裾野を広げるとともに、その研究基盤（の一部）を築いており、文化資源の整備・運用という観点から高く評価されるべきものである。他方、その教育や研究への具体的な活用はこれからの課題だといえる。例えば放送大学が提供する教育コンテンツに活用されている事例は、放送大学附属図書館のOPACで確認できる限りでは、石沢小枝子と新田勇による特別講義『欧文絵本ちりめん本の魅力』（2009）のみで、視聴したところ、ちりめん本の概説に終始した内容だった。また前述の放送大学機関リポジトリで「学内刊行物」と「博士学位論文」のタグがついたコンテンツの中で、「ちりめん本」をキーワードに持つものは一件も確認できなかった。

しかしこのような状況は、放送大学に限ったことではなく、むしろこれからの教育や研究への活用の展開と発展の可能性を示唆するものとして、積極的に捉えていくべきだと考えられる。そうすると、「ちりめん本」の研究史料としての潜在性を探り、研究によってコレクションに新たな「付加価値」を与え、それを教育や展示などの場面へと還元していく、文化資源活用の流れが見えてくるはずである。そのためには、現存するちりめん本が置かれた状況、そしてちりめん本研究の現状を知ることが重要である。

2. 日本国内のちりめん本コレクション

この放送大学附属図書館の資料点数は、他の「ちりめん本」収蔵機関と比較してみても抜きんでている。以下に、それらの機関の収蔵点数や公開状況などを簡単にまとめる。

機関名	点数	専用公開データベース	カタログ/リスト	画像データの公開
放送大学附属図書館	338点	なし	あり	部分的（283件）
聖徳大学博物館[9]	約300点	なし	なし	なし
京都外国語大学	205点	なし	あり[10]	電子展示[11]
国際日本文化研究センター	約200点	あり[12]	←	部分的（77件）
東京女子大学比較文化研究所	不明	あり[13]	←	公開（197件）[14]
国立国会図書館	171点	なし	あり[15]	部分的
梅花女子大学図書館	167点	公開停止？	あり[16]	公開停止？
国際交流基金	116点	なし	あり[17]	
関西大学	103点	なし	あり[18]	
国際子ども図書館	67点	なし	あり[19]	部分的

各機関によって「ちりめん本」の定義が異なるため正確を期すためには個々のコレクションのカタログと収蔵品を精査する必要があるものの、公開されているデータをまとめた限り、放送大学附属図書館のコレクションは「ちりめん本」に関するものとしては国内最大規模だということができる。

公開状況に関しては、多くの機関が何らかの形で画像データのオンライン公開を実現しており、ちりめん本研究を促進するファクターとして高く評価されるべきだといえる。ただし、ちりめん本専用のインターフェースを提供しているのは国際日本文化研究センターと東京女子大学比較文化研究所だけであり、他の機関はリポジトリなどの既存のリソースを活用している。

カタログやデータベースの内容は、各機関の独自の基準によって整備されている。それは、これら日本の主要機関に収蔵されている「ちりめん本」のうち、どれくらいのタイトルが重複しているのか、さらにはそれらがどのような関係、つまり同一あるいは異なる版（板）の関係にあるのかなどを知るためには、各所蔵機関それぞれのカタログもしくはデータベースの記載項目の比較照合、現物の確認が不可欠だということでもある。これは大変手間と時間のかかる作業でもある。後述するように、ちりめん本の研究や教育での活用をこれから発展させていくためには、各所蔵機関を横断あるいは統合するようなデータベースの構築が望ましいのが現状である。

3. ちりめん本研究史概観

従来のちりめん本の研究は大きく分けて二つのアプローチに分けることができる。一つ目は「包括的なアプローチ」であり長谷川武次郎の活動と彼が作成した

[8] 筆者が担当するボン大学日本学専攻の修士課程の授業では、オンライン公開されているPDFのデータを明治期日本の出版印刷文化を知るための教材として積極的に活用し学生から好評を得ていること、またそれをきっかけに「ちりめん本」をテーマに修士論文に取り組む学生が出てきていることも、ここに放送大学への感謝と共に報告しておく。
[9] 大学プレスセンター 2017。
[10] 京都外国語大学付属図書館/京都外国語短期大学付属図書館2007。
[11] https://www.kufs.ac.jp/toshokan/chirimenbon/index.html（2019年10月27日最終アクセス）。
[12] http://shinku.nichibun.ac.jp/chirimen/index.php?disp=JP（2019年10月27日最終アクセス）。
[13] 東京女子大学比較文化研究所所蔵ちりめん本コレクションデジタルアーカイブhttp://lab.twcu.ac.jp/icsc/collection/chirimen/ichiran.html（2019年10月27日最終アクセス）。
[14] 2019年７月現在。同上参照。
[15] 小島；佐藤2001。
[16] 石澤2004：xxi-xxxix。
[17] 国際交流基金2010。
[18] 石原2010。
[19] 江口2005。

ちりめん本の全体に焦点を当てるもの、二つ目は特定のちりめん本のタイトルへの書誌学的、文献学的考察などの「個別の研究関心によるアプローチ」である。以下では両者について簡単にまとめておく。

3.1 ちりめん本への包括的なアプローチ

「ちりめん本」という概念を中心に据えて論じたものの嚆矢としてあげることができるのが作家で児童文学者の福田清人（1904～1995）が二回に渉って『日本古書通信』に連載した二編のエッセイ「日本昔噺の最初の英訳本叢書　ちりめん本」（福田1972a）と「ちりめん本について詳記（附・日本昔噺の外国紹介）」（福田1972b）である。

それから10年の空白の後、再び『日本古書通信』に児童文学研究者アン・ヘリング（1940-）による連載が開始される。三部からなる「縮緬本雑考」（ヘリング1982a、1982b、1982c）と16回に渡って連載された「続・縮緬本雑考」（ヘリング1982d、1982e、1982f、1983a、1983b、1983c、1983d、1983e、1983f、1983g、1983h、1983i、1984a、1984b、1985a、1985b）では、『日本昔噺』シリーズへの書誌学的な検討のみならず、それらの成立背景、長谷川武次郎の国際的な出版活動、挿絵絵師、『Schipppeitaro（竹篦太郎）』（1889年初版）の種本への考察といった、連載という形式を生かした「縮緬本」に対する多角的かつ包括的なアプローチを展開しており、今日でも参照されるべきちりめん本研究の基礎文献である。残念なのは、連載が半ばで途切れてしまったこと[20]、多方面に渡る研究成果を単著として読むことができないということである。

ちりめん本の研究史においてエポックメイキングで、現在でもなお基礎文献としての役割を担っているのが、石澤小枝子の『ちりめん本のすべて』（2004）である。この石澤の労作はちりめん本の個々のタイトルの内容と成立背景のまとめ、長谷川武次郎や絵師、翻訳者たちの伝記や関係の紹介、そして長谷川弘文堂の出版書目と梅花女子大学所蔵のちりめん本のリストなど、ちりめん本を総合的に眺め、詳述している。

また英語文献としてはFrederic A. Sharf（1934-2017）の『Takejiro Hasegawa. Meiji Japan's Preeminent Publisher of Wood-Block-Illustrated Crepe-Paper Book（長谷川武次郎：木版挿絵入り縮緬本を送り出した明治期日本の傑出した出版人）』（1994）を挙げることができる。長谷川武次郎の伝記（Sharf 1994：7-31）、彼に協力した作家や翻訳家の解説（同上：32-59）、長谷川武次郎の出版物のうち厳選されたもののカタログ（同上：60-75）からなるこの単著は、Sharfが長谷川武次郎の孫である西宮雄作氏と知遇を得、提供を受けた「Hasegawa-Nishinomiya archive」（同上：５）と呼ぶところの一次史料に基づき、長谷川武次郎の実業家としての活動や彼と外国人協力者との関係に関する最も詳細な情報を提供するものであり、欠かすことの出来ない基礎文献となっている。

以上の文献はちりめん本研究の初期にあって、その基礎を築きあげたといえる。それをさらに拡張した画期的な資料集として、2014年に勉誠出版から出版された『ちりめん本影印集成　日本昔噺輯篇』（中野；榎本2014a、2014b、2014c、2014d）を挙げることができる。『日本昔噺』の各国語版94点と長谷川弘文堂のカタログ３点を原色原寸で採録したこのアンソロジーは、貴重書であるがゆえに手に取ることが難しい史料の閲覧を容易にするものであり、今後のちりめん本研究のよりどころの一つとして機能するものである。また、編集者の一人である榎本千賀による「解題」（野中；榎本2014d：289-304）は、従来の研究を踏まえ、ちりめん本の製造工程など技術的・物質的な側面、長谷川武次郎の活動や『日本昔噺』の概略などを説明する一方、長谷川弘文堂発行以外のちりめん本への研究の必要性にはっきりと言及しており、今後のちりめん本研究の一つの方向性を示している。

もう一人の編集者であり自らもちりめん本のコレクターである中野幸一は、同じ年に勉誠出版が創刊した雑誌『書物学』に「ちりめん本の世界」というインタビュー記事を寄せ、ちりめん本が「造本・流通・人脈等々、どれをとっても、出版史上・日本文化史上で特質すべきものであることは間違いない」とし、先行研究はあるものの「まだまだ手のついていないことが山積みだ」と指摘している（中野2014：60）。その上で「まずは［ちりめん本の］数をたくさん見ること、そして実際に手に取」り、並べ、比べることで研究の糸口をみつけることを薦め、「ちりめん本を広く、明治の出版文化、そして、世界との関わりで考えていくことができるような時代になったのではないでしょうか」という前向きな言葉でインタビューをしめくくっている（同上：60-61）。前述のちりめん本を収蔵する機関を横断するようなデータベースの有用性を裏打ちするものでもあり、また現代の学問の流れに即したちりめん本への新たなアプローチの可能性あるいは必要性を指摘するものだといえる。

3.2 個別の研究関心によるアプローチ

上述の包括的な取り組みとは別に、2000年代以降、個別の学問的関心からちりめん本を扱う研究も数多く出てきている。本稿ではそれら全てに関して報告することは不可能だが、代表的なものを簡単に紹介しておきたい。

最初に注目すべきは、ちりめん本研究の基礎と言うべき書誌学的・文献学的なアプローチである。代表的なものとして、石井正巳の収集、調査プロジェクト

[20] 実質上の最終回となってしまった「続・縮緬本考16」（ヘリング1985b）の最後で「次回では、さらにもう一つの1880年代に作られた独文民話集と長谷川本との関係について、多少考えてみたい」と述べている。なおヘリングはドイツ語も堪能で、ボン大学での講演やウィーン大学での講義の経験もあり（楠本2009）、日本語と英語のみならずドイツ語の史料を用いた「ちりめん本」の研究を行っていたことをここで強調しておきたい。

（石井2006）や田島一夫の一連の研究（2008；2009；2010；2012a；2012b）を挙げることができる。特に田島（2013）が科研費プロジェクト「ちりめん本『日本昔噺』シリーズの典拠と翻案及び出版版次の研究」（2010-2012年度）で行った現存する同一タイトルの異本の歴史的系統の特定は、ちりめん本研究の方法の一つを具体的にしめしている。同様の方法で研究を進める齋藤祐佳里が2013年いわき明星大学に提出した博士論文『ちりめん本「日本昔噺」シリーズの版に関する研究』はオンラインでも提供されており、このシリーズに該当するちりめん本のタイトルを扱う場合には、参照するべき基礎文献となっている。

近年増えてきているのが、ちりめん本の国際性に注目し、その製作をきっかけに結ばれた人物や文化間の交流、物語りやイメージの循環、変容、再生産など、広義の（文化）翻訳や文化移転（Kulturtransfer）に関する考察であり、松村（2001）、長尾（2006）、レスタ（2014）、石井（2019）を挙げることができる。特に石井（2019）は、小泉八雲の書簡史料に残された長谷川武次郎とのやり取りに注目し、八雲が関わったちりめん本の成立プロセスを再構築している。長谷川武次郎や弘文社と関係のあった人物が遺した史料に「映り込んだ」彼らの活動の痕跡を確認していくこのアプローチは、今後のちりめん本研究にとって重要だといえる。

また長谷川武次郎の活動をより大きな歴史的コンテクストに置き、捉える研究も出てきている。上方での「ちりめん本」出版に関する中野（1996）や榎本（2011）の研究は、「縮緬処理をほどこされた本」というフォーマットの当時の日本国内での受容と位置づけを明らかにするものである。また海外に目をむけた研究としては、長谷川武次郎の国際出版や万国博覧会出品などの海外での積極的な活動、ちりめん本のフランスやドイツでの受容や影響に関する大塚奈奈絵の一連の論考（2011；2013；2015）を挙げることができる。さらに大塚（2016）は、上述の西宮雄作氏から提供を受けた『The Smelling Book』の下絵と海外の図書館に収蔵されている同タイトル作品の比較照合を行っており、新しい史料を活用した領域を切り開いている[21]。

このような個別の関心に基づく様々な研究が示しているのは、石澤（2004）などの包括的な研究が築いてきた土台の上に、ちりめん本研究が新たな展開を始めているということである。

4. メディア史から見た「ちりめん本」研究の可能性

以上の観察結果を踏まえて、筆者の専門であるメディア史という視点から、「ちりめん本」研究の可能性について考えてみたい。

4.1　統合データベースの整備

研究者を悩ませ、また魅了してきた問題の一つに、「ちりめん本という史料群の質的量的全体像が分からない」ということを挙げることができる。それゆえ上述のように、アン・リンクや石澤小枝子などのちりめん本研究のパイオニアたちや、田島一夫や齋藤祐佳里といった現存するちりめん本の歴史的系統を詳らかにしようとする研究者たちは、可能な限りのちりめん本に触れ、比較し、書目の整備に情熱を傾けてきた。

他方その研究の蓄積は、印刷メディア（によって規定された）形式で保存、流通されてきた。研究者はそれらを個別に入手し、比較参照する必要があり、その成果もまた、結局は当人のところに留まったままになるのが常であった。個々の研究者が並列的に煩雑な作業を行い、同じようなデータを生産しているものの、その共有がなされない、研究過程で生み出された情報がリソースとして蓄積してくことが困難な状況である[22]。

その状況を相対化することは、現代において急速に発展、普及している人文情報学（Digital Humanities）を利用することによって ― 少なくとも技術的、原理的には ― 可能になってきている[23]。既に様々な機関で構築、運用されている、多様なオンラインリソースを横断する形での統合データベース[24] のような、「ちりめん本統合データベース」の可能性である。

これまで研究者それぞれが作成し印刷メディアとして発表してきた書目を一つのデータベースに統合し、オンラインでのアクセスを可能にすることによって、持続可能な研究リソースとすることができるはずである。またそこには、既に様々な機関が個別に作成しオンラインで提供しているデータベースやOPACデータ

[21] さらに大塚は、インターネット上の情報によると、2018年「ちりめん本と女性の文化」という展覧会とシンポジウムを企画、開催している（https://www.kanagawa-u.ac.jp/event/details_17513.html　2019年10月29日最終アクセス）。ちりめん本を女性学的な視点から考察する新しい試みとしてここで紹介しておく。

[22] これはあくまでも現代的な視点から見た分析である。現代の学問システムは印刷メディアが可能にした情報の蓄積、それによって可能になった参照と上書き（積み重ね）の上に発達してきた。問題なのは書誌情報や画像情報などの比較参照に関しては、印刷メディアよりもデジタルメディアのほうが適しているということである。

[23] これは書誌学的・文献学的研究が重要性を失うことを意味するのでは決してない。人文科学におけるデジタルメディアの機能を「既存の情報（＝メディア）を一定の形式で取り込み（＝デジタル化）、加工し、つなげることによって、それらに新しい見え方（＝形式）や、つながり（＝関連性）や意味（＝付加価値）をあたえるもの」として考えるならば、取り込まれた情報の出自を保障する情報（＝メタデータ）を生成する書誌学的・文献学的研究こそが、重要視されるべきである。

[24] 例えば、国文学研究資料館が整備運用する『新日本古典席総合データベース』（https://www.nijl.ac.jp/pages/cijproject/　2019年10月29日最終アクセス）や『近代書誌・近代画像データベース』（https://base1.nijl.ac.jp/~kindai/　2019年10月29日最終アクセス）などを参照。

やこれから研究によって生成される書誌情報、あるいは画像データを統合することが考えられる。データの統合にあたっては、既存のメタデータスタンダードを考慮しつつ、これまで個別に作られてきた書目や書誌情報データベースなどの項目をすり合わせ、ちりめん本研究やその周辺の研究領域に不可欠な項目も付け足す必要があるだろう。データベース構築後の保守や運営のコストなどの現実的な問題も出てくるだろうが、そのような問題をクリアすることによって、ちりめん本研究のための持続可能なリソースを構築すると同時に、その研究や教育における利用を活性化させることになるはずである。

4.2 海外のちりめん本とその研究の可能性

さらにそれと平行して、海外にある「ちりめん本」の所在、その書誌データや画像データも収集、統合することができれば、画期的な研究資源となるはずである[25]。海外におけるちりめん本の現存状況の確認は、これまでほぼ手つかずのままだった分野であり、それはちりめん本の研究状況を反映するものでもあった。

「ちりめん本」が輸出品として作られたことの意味をあらためて考えるならば、それらは日本よりも海外で流通し、受容されたと考えるのが自然である。「ちりめん本が与えた影響」への問いは、日本国内ばかりでなく、製作者によって本来意図されていた海外という文脈においてこそ考えられるべきだといえる。日本のちりめん本コレクションは、古書店やギャラリーなどによって海外で集められ国内で販売されたもの[26]、つまり「逆輸入されたちりめん本」によって構築されたものがほとんどである[27]。それに対して海外の図書館などに散在するちりめん本は、研究資料収集の目的で意図的に購入されたものもあるだろうが、それとは異なり、なんらかの経緯でそこに「収まった」ものも多々ある。それゆえ、海外の大学や図書館に収蔵されているものを調査することは、「ちりめん本」という研究資源の現状のみならず、海外での受容の痕跡をトレースするきっかけとなる可能性を秘めているのだ[28]。

例えば筆者が所属するボン大学アジア研究科には、長谷川弘文社による三点の独語書物『東の国からの詩の挨拶』（第四版、1896年）『日本の戯曲　寺子屋・朝顔』（第三版、1900年）、『孝女白菊』（平紙、第七版、1907年）が所蔵されている。それらは全て、日本学者のフリードリッヒ・マックス・トラウツ（1877-1952）[29]が所有していたものであり、その蔵書印から彼が1910年代から20年代にかけて入手したことを伺い知ることができる。［**図１**：『Japnische Dramen. Terakoya und Asagao』第三版（ボン大学所蔵）］ただし、トラウツがいつどこでそれを購入したのか、それらが彼の研究や執筆活動に影響を及ぼしたのかなどは、彼が残した膨大な量の領収書、メモ書きや日記、原稿、著作などと結びつけてはじめて分かることであり、今後の調査課題だといえる。この事例のように、各国機関が所蔵するちりめん本のもともとの所有者が分かる場合は、その所有者が残した別の文書と関連付けることによって、具体的なちりめん本の受容事例を明らかにできる可能性があるといえる。

このように海外に目を向けることは、輸出商品としてのちりめん本が当時置かれた歴史的なコンテクストに目を向けることでもある。それはこれまで手薄だった、海外におけるちりめん本の受容、つまり「誰がどのような経路で販売し」、「誰が購入し、読んだのか」、「どのような日本のイメージが個人や社会に伝えられたのか」など様々な問いかけを可能にする。そして、従来の「日本文化受容史」では顧みられることのなかった在外史料へと、研究者の関心を向かわせるはずである。

4.3 実業家としての長谷川武次郎

輸出商品としてのちりめん本受容の歴史的コンテクストが海外であったように、長谷川武次郎の活動のコンテクストもまた、日本国内や輸出用の書籍やカレンダーの製造販売に留まるものではなかった。

1853年に江戸日本橋の西宮家の次男として生まれた武次郎は、ミッションスクールで英語を習い、外国人のコミュニティーと積極的に関わる傍ら、商いの知識も身につける一方、兄の西宮松之助が家業を次ぎ、食品や嗜好品の輸入販売業「明治屋」を構え成功するのを眺めつつ、その青年期を過す[30]。25歳のときに母方の姓である長谷川を名乗り、そのころから自らも「長谷川商店」として輸入販売業と出版業を営み始める。1877年、印刷業者小宮惣次郎の屋寿と結婚し、出版業

---

[25] 先行する事例として『コーニツキー版　欧州所在日本古書総合目録（Union Catalogue of Early Japanese Books in Europe）』（http://base1.nijl.ac.jp/~oushu/　2019年10月29日最終アクセス）を参照。

[26] 例えば福田（1972：１）は長谷川武次郎の『日本昔噺』について「このシリーズは輸出用に作られたらしく、一年ほど前、ある古書店が逆輸入して拙宅に持参した時の価格が十万円くらいついていた」と述懐している。

[27] 放送大学附属図書館には、扉に著者（翻訳者）の献辞が書かれているもの、元々の所有者と思しい子供特有の筆跡で名前が入れられたもの、明らかに繰り返し読まれ小口がよれよれになりくたびれているものなど、愛玩用としてではなく実際に「使用された＝読まれた」痕跡を留めるものが多々ある。仮に図書館に納入される前の来歴を示す記録があるならば、それらもまたちりめん本受容を解明する貴重な情報だといえる。

[28] これは日本にある「ちりめん本」が何らかの特殊な事情で国内に残ってしまったか、あるいは後世になって意図的に収集されたということでもある。放送大学附属図書館にも海外にあった痕跡を残すものが数多く収蔵されている。

[29] トラウツの伝記に関してはヴァルラーフェンス（2019）、トラウツの遺品の収蔵状況に関しては湯川（2019）を参照。

[30] 長谷川武次郎の伝記に関しては、Sharf（1994：7-31）、石澤（2004：215-236）、大塚（2015：109-111）、榎本（2014：294-297）による。

を拡大していく。大塚（2015：110）によると、長谷川武次郎が「弘文社」の名義で出版に携わった最初の事例は1879年に刊行された森嶋修太郎著『簿記学例題』であり、それに続くのが小宮山弘道訳『近世二大発明　電話機蘇言機』である。この「蘇言機」とは本文中に「フヲノグラフ」と振り仮名が振ってあるように（小宮山1880：81）、エジソンが発明した「蓄音機」のことである。電話と蓄音機という当時最先端の二つの音声メディアの原理と技術を詳述した本であった。『日本昔噺』シリーズの刊行が1885年からのことであるから、長谷川武次郎の出版人としてのキャリアはいわゆる実用書から始まったのだった。しかし、これをきっかけに弘文堂として出版業に専業化しわけではなかった。

長谷川武次郎は日本の音声メディア史にも名を残している。倉田嘉弘『日本レコード文化史』（2006：19-21）によると、1889年１月に鹿鳴館でフォノグラフの改良型蓄音機「グラフォフォン」の試聴会を開いたアメリカグラフォフォン社ヘエルが長谷川武次郎に日本、中国大陸向け支店の開設を薦めたとある。これが実現したかどうかは定かではないが、その後長谷川武次郎は技術者尾花千一と共同で蓄音機の製造販売を始める。1891年８月14日付け読売新聞には「新製　蓄音器」の広告が、「東京芝区西久保巴町十八番地　新蓄音機製造所　尾花製造器所」「同京橋区日吉町十番地同発売所　長谷川商店」の記載と共に掲載されている。またこの広告では蓄音機の様々な用途のほかに、「舶来の品はあまり高価であり且つ取り扱いが手重でありますから、昨年来非常の苦心をなして幾度の試験を経て始めて完全無欠の品を製作いたせり」と独自開発の説明もしており、長谷川武次郎の実業家としての側面を伺い知ることが出来る。

このエピソードから見えてくるのが、新しいものを積極的に取り込みことによってニッチな市場を開拓し、事業化していく長谷川武次郎の実業家としての嗅覚と行動力ではないだろうか。彼は弘文社の立ち上げ後も、長谷川商店の屋号を使いアメリカからのワイン「ツィンファンデル」（Zinfandel）の販売などを進めてもいた[31]。

そのようなニッチな市場を狙った多角経営は、大塚（2015：110）が言及している『簿記学例題』（森山1887：1-14）の「弘文堂出版書目」にも認めることが出来る。そこには弘文社が出版した、（ちりめん本ではない）彩色摺『欧文昔噺』シリーズや『学校用日本昔噺』に混ざって、教室で使用するための掛図、先述の『電話機蘇言機』『簿記学例題』などの実用書のタイトルが並べられているほか、「特約販売品」として他の書肆の出版物や「ジャツパン、メイル」などの英字新聞の広告も掲載されている。さらには、イギリス、アメリカ、ドイツ、フランスから輸入した「高級西洋文具」、「西洋名画写真」、「陶製人像」「室内装飾写真帖」「室内装飾用インキスタンド」「ドイツ製コピイプレス」（湿式複写機）などの輸入雑貨の販売広告、そして「英米独仏四カ国の書籍新聞史御注文」と取り寄せ販売の宣伝も行っている。

出版販売だけでなく、蓄音機の開発販売、欧米からのワインや雑貨、書籍の輸入販売など、長谷川武次郎の活動は日本の一出版人という範疇には納まりきれない。むしろ東京に居ながら国際的な市場を強く意識し、多角的な事業展開をした「実業家」として評価されるべき人物だといえる。国際的な市場と競争への鋭敏な感覚であり、それは1893年のシカゴ、1900年のパリなど万国博覧会に連続して出品しつづけ、入賞しつづけたこと、それゆえ製品の質にこだわり続けたこと（長谷川1914：29）にも現れているし、外国人や海外出版社と直接交渉し契約を結ぶ行動力にも見て取ることが出来る[32]。

以上概観したように、長谷川武次郎の出版活動は、彼の国際的な商業活動というコンテクストでこそ理解するべきである。そのためには既知の史料を読み直すと同時に、新しい史料を探していく作業が必要となるであろう。長谷川武次郎の名が日本レコード史に残されているように、思いがけない場所でその名前に出会う可能性がないとも限らない。少なくとも、彼が手がけた書物のテーマと執筆者はそのことを期待させるに足る多様性を持っている。

また、メディア史にとって興味いのが、蓄音機や文具などの「新しいメディア」を日本国内で販売する一方、木版印刷物という「古いメディア」を海外へ輸出するという、彼の日本と欧米を双方向につなぐ仲介者（メディア＝フィルター）としての役割である。それが長谷川武次郎に限った特殊な事例なのか、メディア技術のレベルでの均質化とメディアコンテンツのレベルでの差異化の同時進行を伴うグローバル化に付随する一般的な現象なのかは今後の検証が必要なテーマである。それはまた次に述べるように、長谷川武次郎が海外輸出向けに作った書物やカレンダーのグローバルなメディア史における位置づけを考えることでもある。

4.4 「ちりめん本」と「ちりめんカレンダー」のメディア史に占める位置

美術評論家坂井犀水（1878-1940）は主幹を務めていた『美術新報』第13巻第３号（1914年１月発行）で、「輸出向けの木版画」を特集し、長谷川武次郎（1853-1938）にインタビューし「木版画の輸出」（1914：26-30）という回想を掲載する一方、洋画家太田三郎（1884-1969）に「木版刷カレンダア」（1914：23-25）の評論を依頼、掲載している。この回想の冒頭で長谷

[31] 1891年９月６日朝日新聞朝刊に「リネル商会代理店　長谷川商店　純粋葡萄酒ジンファンデル」の広告が出ている。

[32] 例えば1904年12月22日付の読売新聞朝刊によると、長谷川武次郎が「リスボン万国博覧会東京出品組合」の委員を務めており、その積極性を伺い知ることができる。

川武次郎はちりめん本の製作と販売について次のように述懐している。

> 木版画の輸出を私が始めたのは、明治16年の頃で、御社の星野君[33]も亜米利加から帰ったばかりでした。兜町で製紙分社というのをやっていた時分でした。木版画といってもその頃は一枚絵のようなものではなく、日本の昔噺を木版刷の絵本にして英文の説明を加えて出したのが始めで、外国に知り合いがあったもんですから直ちに輸出をしましたのですかれども、あまり大した売行きもありませんでした。その中に不図縮紙でしたらばと思いついてやってみましたところ、これが案外評判がよろしくて歓迎されました。がこれは木版の趣味だとか絵がどうだとか言うことからではなく、ただ一寸面白いというだけのことで、つまり物珍しいという点で歓迎せられたものです。ところがどんどん目慣れて来ると縮紙の本は見悪くくもあり紙も毛ばだちなどして、あんまり善いものではないので、次第に売れ方も衰えてきました。しかし既にその頃には西洋人が日本の木版について漸く趣味を覚え始め、次第に研究的にもなってきたところからだんだん一枚絵が出るようになりました。（長谷川1914：26）

ここで確認しておきたいのは、今日「平紙版」などと呼ばれている、狭義のちりめん本ではない昔噺シリーズが先に作られており、その売れ行きが思わしくないために縮緬処理が施されたバージョンが導入されたという経緯である。ここでもまた、状況に応じて商品を差異化することによってニッチな市場を開拓していく積極的な実業家としての姿勢をみてとることができる。他方、この回想を鵜呑みにするならば、ちりめん本の販売が、その珍しさがなくなっていくとともに、頭落ちになっていったということになる。果たして本当にそうだったのだろうか。

例えば筆者所蔵の『東の国からの詩の挨拶（Dichtergrüße aus dem Osten）』は第七版。［**図 2**：『東の国からの詩の挨拶』第七版（筆者所蔵）］通例言われるような一板2000摺と少なめに仮定しても、七版となると通算14000冊。また齋藤（2013：5）が明らかにしたような、日本昔噺シリーズの『Momotaro』などの事例は、初版が1885年、再版が1886年、16版が1921年と版を重ねたことが分かっており、16版で通算32000冊となる。

上に引用した長谷川武次郎の回想が、これくらいの部数を念頭においてのことだったのか、それとも単に「売行きが徐々に落ちた」というくらいの意味合いでの発言だったのかは定かではないが、肝心なのが彼にとっても「ちりめん本」が一種の際物であったということ、それにも関わらず ― 今日の視点から見るとすくなくとも ― 多くの部数と点数を「ちりめん本」というメディア形式（フォーマット）で生産し、販売し続けていたという事実である。

上述のように、その長谷川光文社の出版物全体を把握することは容易ではないが、メディア史的に肝心なのは、それらが長谷川弘文社のイニシアチブ、つまり独自企画のものだったのか、それとも持ち込み企画による自費出版のようなものだったのか、という点である。これは個別のタイトルごとに史料を丹念に読み込むことでしか答えようのない問題だが、先行研究が示すのが持ち込みの企画が確かに存在していたという事実である。あくまでも仮説だが、最初の『日本昔噺』シリーズは長谷川武次郎が協力者とともに企画、製造したものだったのが、その後の様々な書物は「ちりめん本」というメディア形式に魅せられた、ラフカディオ・ハーンのような依頼者（＝協力者）（石井2019）によるイニシアチブによるものが多かったのではないだろうか。そのような受託生産に近い形式は、例えば放送大学図書館が所蔵する、横浜の植物輸出商Boehmer＆Co.[34]の商品カタログなどの存在からも伺い知ることができる。［**図 3**：『日本の球根、植物、種子の価格表』1895-1896年（放送大学附属図書館所蔵）］もし仮に現代的な意味での受託生産、つまり依頼者の出資によって依頼された本を製作していたのであれば、長谷川弘文社が経済的なリスクを負う可能性は低かったに違いない。その機能は「出版社」というよりも「工房」に近く、長谷川武次郎は顧客と職人とをつなぐ媒介者（コーディネーター）という役回りである。

また「ちりめん本」とは、日本の伝統的な書籍・印刷業が近代化とグローバル化に直面し、国民国家形成とともに「日本全国という均質空間」として出現した国内市場全体に適応する過程で生み出されたものだともいえる。東京を中心として日本の印刷技術、出版と流通の構造が量的質的に近代化されていくなかで（川井；印刷博物館2012）、明治初めまでに印刷物生産において主導的なメディア（Leitmedium）として機能してた木版印刷は、新しい活版印刷や小口木版、石版印刷などによってその地位を失い、「伝統的」あるいは「芸術的」な表現形式というニッチな存在へと変化を遂げた。それは木版印刷とその経済的効率性を維持するだけの技術的社会的なリソース（のバランス）が失れたことを意味している。長谷川武次郎が出版に進出したときには、木版メディアを使って印刷物を生産することが特別なこと、その木版メディアに石版印刷や活版印刷あるいは「手がき」のものに見られない付加価値、質感や美的効果を見出した者が「わざわざ」行うことに変わりつつあったのである。そのような高

[33] 星野錫（1855-1938）。1887年から数年間渡米し、コロタイプなど当時最新の印刷技術を調査、習得。その後王子製紙で務めたのち、1896年に独立し東京印刷を設立。1890年に画報社を設立、『美術新報』を発行。長谷川武次郎が「御社の星野君」といっていることからも、彼のネットワークの一端をうかがい知ることができる。

[34] 横浜ベーマー商会。お雇い外国人として1872年に来日していたLouis Boehmer（1843-1896）が1882年に横浜に設立。

い生産コストをかけてでも木版による「ちりめん本」を作って欲しい、手に入れたいと思ったのは、木版を特別なものと思わない日本人ではなく、「日本の木版について漸く趣味を覚え始め、次第に研究的にもなってきた」（長谷川1914：26）外国人だったのではないだろうか。筆者が放送大学附属図書館で確認した長谷川武次郎が作ったものの中に、日本語のちりめん本がなかったことも、この木版印刷を廻るメディア史の一側面と考えられるのである。

それらの書物形式の印刷物とは別に、長谷川弘文社はカレンダーの生産、販売も手がけるようになる。

> 私がカレンダアを初めたのは、明治三十年で、これは非常な喝采を博して、一時は困るくらい盛んに注文がありました。近頃では類似の品がたくさん出るようになりました。私が自分でやって居りながらこんな事を申すのもいかがなものですが、方々でたくさん色々なものが出来て盛んに輸出することは誠に結構な次第でもありますけれども、その盛んになるにつれて粗造品の多くなるのには実際困ります。もしこの勢いで進んだならばせっかく輸出品として頭を挙げてきた木版画も粗造品のために嫌われるようなことになりはすまいかと思われます（長谷川1914：26）。

長谷川武次郎製作のカレンダーはこれまでほぼ手付かずの研究領域であり、これからの課題でもある。本稿でこの記事だけを頼りに言えることは、1914年の長谷川武次郎本人はちりめん本ではなく、カレンダーを有力な商品を捉えていたということである。これはカレンダー生産の経済性が、書物生産ほどの経済リスクを伴うものでもなかったであろうことからも理解できる。部外者のテキストをあてにすることなく、ほぼ身内の画工や木版職人だけで生産することが可能で、また数年にわたって在庫を抱えることなく、確実に年単位で売り切れる商材だったはずである。そのように生産リスクが低いということ、毎年消費されるメディアだったということが合わさった結果、多様な形態のカレンダーが残されることにつながったと考えられるのである。［**図4**：1896年独語小型カレンダー（4-1）、1903年冊子型カレンダー（4-2）、1914年短冊型カレンダー（4-3）（いずれも放送大学所蔵）］

その木版カレンダーの生産の容易さは、同業者の新規参入を促し、粗悪品が出回り、その結果木版カレンダー市場というニッチそのものが衰退してしまうという、長谷川武次郎の危機感につながってもいる。上述のように、彼の商品の質に対する厳しい姿勢は単なる美的動機だけでなく、経済的動機にも直接繋がっていたのである。

他方長谷川武次郎は、グローバルな印刷物市場における木版メディアの限界も認識していた。

> しかし趣味の上からは兎も角、現在の木版というものが何うもこのままでは時勢とともに歩んでいけないようにも思われます。四年ばかり前に亜米利加の婦人雑誌の『レディース、ホーム、ジョルナル』という雑誌社から、クリスマスナンバーの口絵に日本の木版画を入れたいから古画の複製でも宜しいから見積ってくれといってきましたから、私のことですから少しは割りは高いかとも思いましたけれども十分に見積もってやりましたら、それでもその年の七月注文が来まして、十一月末か十二月初旬までに米国へ届くように頼むといってきましたが、さてその数を見ると常ならば百万だけれどもクリスマス号で余計売る見込みだから百二十万というのでまったく驚いてしまった。日本中の木版職工をことごとく集め得たとしたところで、一枚一枚絵の具をつけて紙にあててはバレンでこすっているのではそんな大きな数はとても一年かかっても出来るはずがない。仕方がないから木版というものは、こうこういうものだということを細かに説明してとても御注文に応じ難いといって断ってやりました。ご承知の通り木版の命というものはそう何万でも無際限に刷れるというものではないので多くて二千か三千くらいが関の山です。だから数を多く刷るには、同じ板木を多く作るのですが、何しろ百二十万という数字ではどうにも仕方がない。元来この木版というものも一々バレンでこすっていく間に深い味もあるので、また時にはカラ摺ととなえて顔の肉などを浮き上がらせて見せたり布目などをつけたりする為に絵の具をつけないカラの版を刷ることがあります。世間ではカラ摺は紙をたくさん重ねて置いてかかとで踏むといいますけれども実際は肱で推すのです。これなども肉体のやんわりした力で推すところが宜しいとしてあるのですが、こんな事をしているのですからどうも確かに時勢には伴わないもののようにも思われます。（長谷川1914：27）

長谷川弘文社が得意とした手仕事による木版メディアの生産性と経済性は、あくまでもニッチな市場にしか対応できなかった。近代印刷技術によって機械的に量産され、「マスメディア」として不特定多数の大衆に向けて流通される雑誌メディアの世界では、木版印刷は生き残りようがなかったのである。それは雑誌ばかりでなく、書物生産でも同様であった。

その事情は国内においても同様だった。当時の日本においては、アメリカで確立していたような近代的な印刷技術による「書物」が、スタンダードなメディア形式として社会に浸透し、人々に内面化されつつあった。そしてそのメディア史の再編成が進む中で、「木版本」は標準的な書物のイメージに収まりきれない、「古いくさいもの」や「美しいもの」「珍しいの」といった、特別な何かへと周縁化されつつあった。そのような文脈において「ちりめん本」がどのように認識さ

れていたのかという問題は、その具体的な流通と受容を検証することによって、明らかにされるべきことがらだといえる。

このような印刷メディア史のなかで長谷川武次郎を眺めるならば、彼の活動は日本国内では衰退する一方だった木版メディアを、国際的なメディア環境のなかに定位し、新たな付加価値を与えるものだったといえよう。19世紀半ばから進行した、日本の近代化とグローバル化のプロセスへの適応のひとつの具体的な事例である。長谷川武次郎は西洋からの文物を吸収し国内で応用するだけではなく、既存のものを西洋市場へと適応させ流通さた点においてユニークなのである。

長谷川武次郎が海外の出版社などと提携し、積極的に海外展開を行っていたことは、多くの研究者が指摘してきた。他方Sharf（1994）や石井（2019）などの例外を除いて、その活動の具体的なあり方に関してはその詳細を描き出すには至っていない。大塚（2011：17）が言及している「長谷川と外国の出版社との書簡類」などが公開されることがあればその解明が大きく進むことは間違いないが、それ以外でも例えば海外に残されている関連史料と結びつけることによって、長谷川弘文社の国際的な活動を実証的に描きだしていくことができるかもしれない。

例えば、放送大学所蔵の「ちりめん本コレクション」の調査で得られた新しい知見として、Karl Florenzが訳したおとぎ話シリーズがドイツの出版社Otto Harrasowitzを取次として、ドイツ語圏で流通、販売された、あるいはされる予定だったということが分かった[35]。［**図５**：『東の国からの詩の挨拶』第四版（放送大学所蔵）］従来はドイツの提携先としてはライプツィッヒのAmelang出版社のみが知られていたが、それとは別の提携ルートがあった可能性が考えられるのだ。これについては現在まで存続している両出版社の関連史料の調査を進めると同時に、当時の書籍広告や書籍業者組合の年報などで、該当する長谷川弘文社の商品がどのように流通、販売されていたのか、その痕跡をさがしていきたいと思っている。

また長谷川武次郎とドイツとのつながりは、単に製品の販売にとどまるものではなかった。例えば、彼はドイツの印刷業界に関心を示し（長谷川1914：26-28）、ドイツの研究者とも積極的に交流していた。従来の研究では顧みられてこなかったこれらの証言を通して見えてくるのが、長谷川武次郎がグローバルな市場競争に積極的に身を置き、その環境要因に応じて自らの事業を最適化していた姿である。そのような長谷川の海外向けの活動は、国内外での史料の調査と再検討を通じてその痕跡を丹念に探し、明らかにすることができるはずである。

4.5 日本人の自己表出の歴史的事例としての「ちりめん本」や「カレンダー」

前述の『美術新報』第13巻第３号で太田三郎（1914：23-25）は木版刷りのカレンダーに対して極めて辛らつな評論を展開している。当時の観光地の旅館に見られる、畳敷きの部屋に椅子とテーブルを置き、その部屋をカバーをかけた靴であるき「日本を堪能する」西洋人（太田1914：23）というイメージを引き合いに出しながら、日本文化に感心しつつも自らの文化のものさしで「日本を見つけていく」西洋人と、あえてそれに適応していく日本人の相互作用として木版カレンダーを理解するのである。

> この［木版刷りカレンダーという］印刷物に表れたところのものは、それは遺憾なく発揮させられら日本木版の特色ではなく、そうかといってまたたくみに行われた彼我製版の手法の調節でもなく、実は如何にせば彼のわがままな異国人をして、この窮屈味を感ぜしめないでこの方へ招き入れられようかと心を砕いた惨憺たる苦心の痕そのものである（太田1914：24）。

だからこそ、輸出カレンダーは日本人だけがが能動的に「外国人にとっての日本」を探ることで生み出されたものにすぎないという批判である[36]。それは西洋人が他者として描いた「日本」（オリエンタリズム）を日本人が無批判に内面化する、あるいは積極的にそれに自らを当てはめていくという問題であり、近代における日本（人）の自己イメージ構築におけるジレンマでもある。太田はさらに、その心的態度の要因を経済的な動機に求め、考察をつづける。

> 怜悧な日本商人は、その目的を遂行する為にはなにものをも犠牲にして顧みない。彼らは日本木版独特の妙味そのものさえ、あえて虐待し蓋して平然としているのである。
>
> 例えば彼らの製作するものの中に、木版画の用紙を縮緬紙にしたのがあるが、これなども取りもなおさずその一つである（太田1914：24）。

平紙によって培われてきた木版画の技法とその美的効果が、縮緬紙によって損なわれると主張し、表面に複雑な凹凸を持つ縮緬紙は、単に銅版画の複雑な線描に親しんだ西洋人の資格を満足させるという商業的な動機によるものでしかないと一蹴する。また「摺りぼかしの技法の濫用」も美的効果ではなく、外国人を喜ばせるためであると切って捨てる。

この歯に衣着せぬ評論は、先ほど引用した長谷川武

[35] 放送大学附属図書館所蔵ちりめん本『Dichtergrüße aus dem Osten』（No. 249）の巻末広告を参照。

[36] 太田の「彼我製版の手法の調節ではなく」という指摘はカレンダーだけでなく、ちりめん本にも当てはまる。技術的には日本で培われてきた木版印刷やチリメン処理などの紙の加工と欧米由来の活版印刷で作られたのがちりめん本だが、前者が全体のフォーマットを規定する支配的なメディアとして機能している。それゆえ太田のこの評論は、長谷川武次郎が輸出向けに作った印刷物全体にあてはまるものとして読むことができる。

次郎の回想の直前に掲載されており、その編集方針のおおらかさ（？）にも驚かされるが、太田があくまでも芸術家の立場から論じているのに対して、長谷川は「どれが売れたか」あるいは「契約を守れるか」などあくまでも経営者の視点から回想しており、批判が批判として機能せず、議論としてはかみ合っていない。

また「輸出向けの木版画」という特集を設定した坂井自身も、輸出用カレンダーに異国趣味（エキゾチシズム）を見出している。

> それは一種の異国的情調に対する哀願ともいうべきものを現しているところが面白い、東西人種の接触の間に生じたる一つの嗜好とも見るべきものが現れて居るところが面白い（坂井1914：30）。

太田が批判した他者によって構築された日本の内面化と再生産は、坂井にとっては異文化交流の結果であった。長谷川にとってそれはまずもって、「売れ筋の商品」を追求した結果であった。それはちりめん本やカレンダー製作における彼の意識が、「日本の何を見せるか」ではなく、「依頼主や購入主がどのような『日本』をもとめているのか」つまり「日本がどう見られるか」によって規定されていたということである。そこから導かれるのが、ちりめん本やカレンダーの製作プロセスの具体的なあり方への関心である。どのような他者とのやり取りによって製作が進められたのか、つまり「誰のどのような日本」が商品として具象化していったのか、あるいはどのような他者を想定して商品を作っていたのかという、異文化間コミュニケーション（のシュミレーション）としての製作プロセスへの問いである。

このちりめん本やちりめんカレンダーに見られるグローバルなコンテクストにおける「日本的なものの」の表出の在り方は、現代日本におけるクール・ジャパン政策とそれに付随する現象と類似する構造を持つといえよう。海外で高く評価されるであろう「日本」の「コンテンツ」や「プロダクツ」を積極的に探し、生み出していく姿勢は、「クール・ジャパン」という「他者の視点」によって「日本」を規定していくものであり、そこには太田三郎が批判した輸出用木版カレンダー製作者の姿を重ね合わせることもできるし、成功した事業家としての長谷川武次郎の姿を見出すこともできるであろう。いずれにせよ、ちりめん本の隆盛と衰退、受容と影響を分析し、理解していくことは、「クール・ジャパン（政策）」がもたらすものと「そのあと」を考えるうえで示唆的であり、有意義なテーマだといえる。またそのようにして現代とちりめん本とを接続させることによって、この既知の対象に新しい付加価値を与えることができるはずである。

謝辞

放送大学附属図書館でたくさんのちりめん本を一つ一つ手に取り ― 厚手でがさがさざらざらしたり、あるいはしなやかでやさしい布のような ― 質感を味わいながら、ページを手繰った時間は、物と人とが紡いできたメディアの歴史を感じることができ、手に残った感触とともに忘れられない豊かな時間となりました。今回の調査のためにご尽力いただいた近藤成一附属図書館館長、ならびに調査期間中に様々な形でサポートをしていただいた附属図書館図書情報課の真中孝行課長補佐をはじめ図書館スタッフのみなさまに、この場を借りて心より御礼申しあげます。

文献

Sharf, Frederic A.（1994）：Takejiro Hasegawa. Meiji Japan's Preeminent Publisher of Wood-Block-Illustrated Crepe-Paper Books. Salem, Mass.：Peabody Essex Museum（＝Peabody Essex Museum collections, 130, 4）.

石井花（2019）「小泉八雲とちりめん本：『若返りの泉』の成立過程を中心に」『ヘルン研究（4）』富山大学ヘルン研究会　54-84頁。

石井正巳（2006）『明治期に刊行されたチリメン本の基礎的研究。平成17年度広域科学教科教育学研究経費報告書』東京学芸大学。

石澤小枝子（2004）『ちりめん本のすべて　明治の欧文挿絵本』三弥井書店。

石澤小枝子；新田勇（2009）『欧文絵本ちりめん本の魅力』放送大学学園（VHSビデオカセット）。

石原敏子（2010）「関西大学図書館所蔵ちりめん本の整理」『関西大学外国語学部紀要（2）』関西大学外国語学部　49-72頁。

ハルトムート・ヴァルラーフェンス（2019）「フリードリッヒ・マックス・トラウツ（1877-1952）　生涯と功績」ラインハルト・ツェルナー；ハラルド・マイヤー（編）『トラウツ・コレクション　日本研究者フリードリヒ・M・トラウツ（1877-1952）が遺した視覚資料』München：Iudicium　85-97頁。

江口磨希（2005）『国際子ども図書館所蔵ちりめん本について（日本児童文学の流れ）』『国際子ども図書館児童文学連続講座講義録2005』国立国会図書館国際子ども図書館　143-153頁。

榎本千賀（2011）「ちりめん本研究。解題・翻訳　　松室八千三版『昔噺』」『大妻女子大学紀要。文系43』大妻女子大学　93-123頁。

太田三郎「木版刷カレンダア」『美術新報13（3）』画報社　23-25頁。

大塚奈奈絵（2011）「テラコヤ（寺子屋）『日本』を発信した長谷川武次郎の出版」『国立国会図書館月報（604）』国立国会図書館　4-17頁。

大塚奈奈絵（2013）「木版挿絵本のインパクト 1900年パリ万博に出品された『寺子屋』」『日本大学大学院総合社会情報研究科紀要（14）』日本大学大学院総合社会情報研究科　13-19頁。

大塚奈奈絵（2015）「明治半ばの欧文挿絵本出版状況 長谷川武次郎のちりめん本を中心に」 林洋子；Christophe Marquet（編）『テキストとイメージを編む出版文化の日仏交流』勉誠出版　107-130頁。

大塚奈奈絵（2016）「長谷川武次郎のちりめん本The Smiling Bookの下絵をめぐって」『国立国会図書館月報

(659)』国立国会図書館　22-28頁。
川井昌太郎；印刷博物館（編）(2012)『印刷都市東京と近代日本』印刷博物館。
京都外国語大学付属図書館；京都外国語短期大学付属図書館（編）(2007)『文明開化期のちりめん本と浮世絵 学校法人京都外国語大学創立60周年記念稀覯書展示会』京都外国語大学付属図書館/京都外国語短期大学付属図書館。
楠本君恵（2009）「日本文化史の探訪者　アン・ヘリング教授」『経済志林76（3)』 法政大学経済学部学会 43-58頁。
国際交流基金（2010）「JFICライブラリー所蔵『ちりめん本』リスト」https://www.jpf.go.jp/j/about/jfic/lib/archive/pdf/crepe-paper_bookslist.pdf（2019年10月27日最終アクセス）。
小島庸亨；佐藤典子（2001）「国立国会図書館所蔵ちりめん本目録」『参考書誌研究（54)』 国立国会図書館 36-68頁。
小宮山弘道（訳）(1880)『近世二大発明伝話機蘇言機』弘文社。
倉田嘉弘（2006）『日本レコード文化史』岩波書店。
齋藤祐佳里（2013）「ちりめん本「日本昔噺」シリーズの版に関する研究」（博士論文）いわき明星大学大学院 http://id.nii.ac.jp/1253/00000039/（2019年10月27日最終アクセス）。
坂井犀水「輸出向の木版画に就いて」『美術新報13（3)』画報社　30頁。
大学プレスセンター（2017）「聖徳大学が収蔵名品展「ちりめん本　明治期に海を渡った日本の昔噺」を８月26日まで開催中」聖徳大学　https://www.u-presscenter.jp/2017/03/post-37134.html（2019年10月30日最終アクセス）。
田嶋一夫（2008）「ちりめん本『日本昔噺』研究の現状と課題」『いわき明星大学大学院人文学研究科紀要（6)』いわき明星大学大学院人文学研究科　1-12頁。
田嶋一夫（2009）「ちりめん本「日本昔噺」シリーズ『舌切雀』『瘤取』考 ― 典拠と翻案『宇治拾遺物語』との関連」『いわき明星大学大学院人文学研究科紀要（7)』いわき明星大学大学院人文学研究科　1-12頁。
田嶋一夫（2010）「ちりめん本「日本昔噺」シリーズ『ねずみのよめいり』考」『いわき明星大学大学院人文学研究科紀要（8)』いわき明星大学大学院人文学研究科 1-14頁。
田嶋一夫（2012a）「ちりめん本『日本昔噺』シリーズ『俵の藤太』考」『いわき明星大学大学院人文学研究科紀要（9)』いわき明星大学大学院人文学研究科　16-24頁。
田嶋一夫（2012b）「ちりめん本『日本昔噺』シリーズ『海月』考」『いわき明星大学大学院人文学研究科紀要（10)』いわき明星大学大学院人文学研究科　13-21頁。
田嶋一夫（2012c）「ちりめん本における記紀神話：N0.9『八頭ノ大蛇』の典拠と翻案」『いわき明星大学大学院人文学研究科紀要（11)』いわき明星大学大学院人文学研究科　1-11頁。
田島一夫（2013）「科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書」https://kaken.nii.ac.jp/ja/file/KAKENHI-PROJECT-22520188/22520188seika.pdf（2019年10月30日最終アクセス）。
長尾佳代子（2006）「仏の放光と蜘蛛の糸　ポール・ケイラスの原作に日本の絵師が重ねたイメージ」『大阪体育大学紀要37』大阪体育大学　17-32頁。
中野幸一（1996）「上方版チリメン本の日本昔噺」『日本古書通信61（5)』日本古書通信社　2-4頁。
中野幸一（2014）「ちりめん本の世界」勉誠出版『書物学１』89-96頁。
中野幸一；榎本千賀（2014b）『ちりめん本影印集成　日本昔噺輯篇　第二冊　フランス語版・イタリア語版・ロシア語版』勉誠出版。
中野幸一；榎本千賀（2014c）『ちりめん本影印集成　日本昔噺輯篇　第三冊　ドイツ語版・ポルトガル語版・スウェーデン語版』勉誠出版。
中野幸一；榎本千賀（2014d）『ちりめん本影印集成　日本昔噺輯篇　第四冊　スペイン語版・カタログ三種・解題』勉誠出版。
福田清人（1972a）「日本昔噺の最初の英訳本叢書　ちりめん本について」『日本古書通信37（2)』日本古書通信社　１頁。
福田清人（1972b）「ちりめん本について詳記―附・日本昔噺の外国紹介」『日本古書通信37（5)』日本古書通信社　2-4頁。
村松定史（2001）「異文化交流のひとこま：ヴェルハーレンと縮緬本」『研究紀要８』 東京成徳大学　41-54頁。
長谷川武次郎（1914）「木版画の輸出」『美術新報13（3)』画報社　26-30頁。
アン・ヘリング（1982a）「縮緬本雑考（上)」『日本古書通信47（5)』日本古書通信社　4-5頁。
アン・ヘリング（1982b）「縮緬本雑考（中)」『日本古書通信47（6)』日本古書通信社　3-5頁。
アン・ヘリング（1982c）「縮緬本雑考（下)」『日本古書通信47（7)』日本古書通信社　6-7頁。
アン・ヘリング（1982d）「続・縮緬本雑考　1」『日本古書通信47（9)』日本古書通信社　12-14頁。
アン・ヘリング（1982e）「続・縮緬本雑考　2」『日本古書通信47（11)』日本古書通信社　10-12頁。
アン・ヘリング（1982f）「続・縮緬本雑考　3」『日本古書通信47（12)』日本古書通信社　12-13頁。
アン・ヘリング（1983a）「続・縮緬本雑考　4」『日本古書通信48（2)』日本古書通信社　14-15頁。
アン・ヘリング（1983b）「続・縮緬本雑考　5」『日本古書通信48（3)』日本古書通信社　10-11頁。
アン・ヘリング（1983c）「続・縮緬本雑考　6」『日本古書通信48（4)』日本古書通信社　16-17頁。
アン・ヘリング（1983d）「続・縮緬本雑考　7」『日本古書通信48（5)』日本古書通信社　14-15頁。
アン・ヘリング（1983e）「続・縮緬本雑考　8」『日本古書通信48（7)』日本古書通信社　10-12頁。
アン・ヘリング（1983f）「続・縮緬本雑考　9」『日本古書通信48（8)』日本古書通信社　8-10頁。
アン・ヘリング（1983g）「続・縮面本雑考 10」『日本古書通信48（9)』日本古書通信社　10-11頁。
アン・ヘリング（1983h）「続・縮緬本雑考 11」『日本古書通信48（10)』日本古書通信社　10-11頁。
アン・ヘリング（1983i）「続・縮緬本雑考 12」『日本古書通信48（11)』日本古書通信社　12-13頁。
アン・ヘリング（1984a）「続・縮緬本雑考 13」『日本古書通信49（4)』日本古書通信社　18-21頁。
アン・ヘリング（1984b）「続・縮緬本雑考 14」『日本古書通信49（6)』日本古書通信社　p14-15頁。
アン・ヘリング（1985a）「続・縮緬本雑考 15」『日本古書通信50（5)』日本古書通信社　6-7頁。
アン・ヘリング（1985b）「続・縮緬本雑考 16」『日本古書通信50（12)』日本古書通信社　12-13頁。

放送大学（編）（発行年不詳）『ちりめん本 ～昔の絵で見る昔噺～』放送大学。
放送大学（編）（2011）『放送大学附属図書館所蔵コレクション図録』放送大学。
放送大学附属図書館（編）（2000）『放送大学附属図書館所蔵コレクション　日本残像　写真で見る幕末・明治』放送大学。
放送大学附属図書館（編）（2001）『放送大学図書館所蔵目録　ちりめん本　長谷川武次郎とちりめん本の歴史』放送大学附属図書館。
森山修太郎（1887）『簿記学例題』（訂２版）弘文社。
湯川史郎（2019）「フリードリッヒ・マックス・トラウツが遺したもの　遺品の分散過程と収蔵機関について」ラインハルト・ツェルナー；ハラルド・マイヤー（編）『トラウツ・コレクション　日本研究者フリードリヒ・M・トラウツ（1877-1952）が遺した視覚資料』München：Iudicium　112-121頁。
ダニエーレ・レスタ（2014）「ちりめん本『The OGRES of OYEYAMA（『大江山』）』の翻訳　グリフィス訳『Raiko and the Shi-Ten Doji』の影響をめぐって」『東アジア比較文化研究（13）』東アジア比較文化国際会議日本支部　157-171頁。

（2019年10月31日受理）

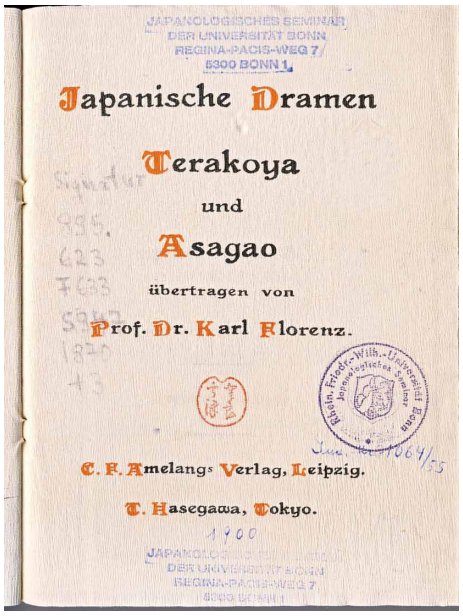


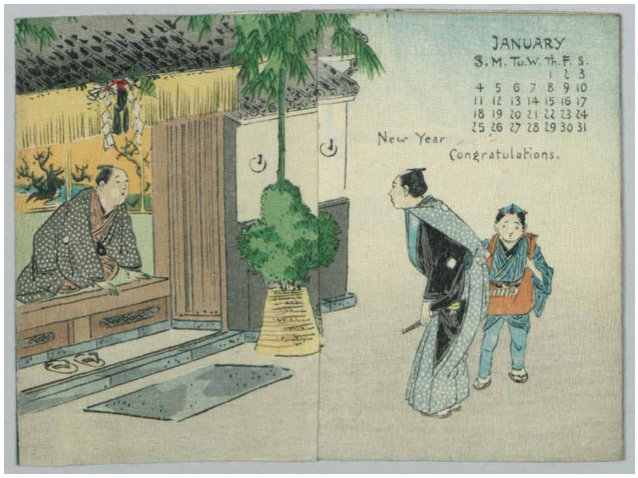
図１　『日本の芝居　寺子屋と朝顔』第三版（ボン大学所蔵）

図２　『東の国からの詩の挨拶』第七版（筆者所蔵）

図３　『日本の球根、植物、種子の価格表』1895-1896年（放送大学附属図書館所蔵）

4－1

4－2



4－3

図 4　1896年独語小型カレンダー（4－1）、1903年冊子型カレンダー（4－2）、1914年短冊型カレンダー（4－3）（いずれも放送大学所蔵）

図 5　『東の国からの詩の挨拶』第四版（放送大学所蔵）